

平成 26 年 12 月 22 日

## 「日本の畜産業の将来と米国への要望」

台頭するアジア食糧市場における米国産飼料穀物利用振興に関する検討会

### 背景

輸出に注目した日本農業の展開についてまとめた 2013 年 5 月 20 日の「アジア食料市場への日本の挑戦」の中で、日本からの畜産物輸出の戦略について提言がなされている<sup>1)</sup>が、そのためには何が米国に期待されるのかを本検討会で検討し、米国への要望を提言する。

### 望まれる日本の畜産業の将来と日米の貿易関係

国内は人口の減少で市場が縮小するが、日本産の食料の供給先は世界にある。特に成長著しいアジア諸国に向け、付加価値を付けて輸出するという加工貿易型の輸出に、日本畜産業の望ましい発展の可能性が存在する。このような特別な付加価値を付けた輸出は、畜産業に限らず加工食品の品質向上や地域ブランドの確立などを通じて今でも行われているが、これをさらに進めることにより、農産物輸出国としての日本の農業を再生させることができる。国内市場に加えてそのような市場に畜産物を供給するためには、年間 2000 万トン程度の穀物輸入が必要とされるが、その確保には、やみくもに産地の多角化などでリスクの拡大を行うのではなく、むしろインフラが充実し政治的關係も安定している輸出国すなわち米国とのバルク穀物供給のパイプを確固たるものにし、どのような事態が生じても確実に必要量を確保できる関係を築くことが必須であり、食料安全保障の観点からも重要である。さらに、そのような供給のパイプを利用し、輸入トウモロコシからのバイオエタノール生産システムを穀物受け入れ施設に併設すること、この供給パイプとともにトレーサビリティに基づく高品質穀物の流通体制を構築し、バイオテクノロジーによる機能性付加穀物・食品の利用を広げるといった可能性を探ることが求められる。

### 米国穀物業界への提言

上記の望まれる日本の畜産業の将来と日米の貿易関係を構築するため、以下を提言する。

- 米国内インフラの持続的活用によるバルク穀物の高品質で安定した供給の継続
- バルク輸送の船舶大規模化などによるさらなる輸送効率化によるコストダウン
- リアルタイムでの穀物生産・生育状況の情報提供
- バイオテクノロジーによる機能性付加穀物・食品の創生
- トレーサビリティや個別の生産契約に基づく高付加価値穀物の委託生産市場の創生

<sup>1)</sup> 「アジア食料市場への日本の挑戦」（台頭するアジアの食糧市場への日本の貢献検討会、2013 年 5 月 20 日）